

新春インタビュー 2015 気仙の針路

③



陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室 紳也さん(59)

— 神奈川県から毎月1回陸前高田市に訪れ、地域包括ケアアドバイザーをされている。役割や就任のきっかけを。

岩室 陸前高田に来ると、まずは災害F.Mの番組収録。屋過ぎは、市役所で保健師・栄養士や保健所などの関係者、市部課長らと打ち合わせを行い、翌日ある市保健医療福祉未来図会議の準備に入る。翌朝に県立高田病院に向き、ミーティングに参加しながら話題提供。市役所に来て、未来図会議に臨む。

未来図会議に手ごたえより多くの人々に「はまかだ」を

役割を簡単に言うると、一人ひとりが元気になるまちづくりを、一緒に歩みながら考えしていく。これまで少しずつではあるが、元氣なまちづくりへと向かっている実感はある。

その成果の一つが、未来図会議から生まれた「はまかだ」です。運動」。住民が集まる

さまざまな空間で「はまかだ」を「霧囲気」を指す取り組みで、一市町村が作った標語を、保健所が自殺防止策として取り上げる流れは従来にはなかった。地域の中にスッと浸透していった。

私は平成2年ごろから、エイズの予防教育にかかわっていた。その中で9年に佐々木亮

平さん(岩室氏と同じくケアアドバイザーを務める保健師、22年3月まで陸前高田市職員)と知り合った。佐々木さんとのつながりで、震災前の陸前高田で2度、講演を行った。神奈川県内外で保健計画や健康のまちづくりにも携わり、一定のノウハウと思いはあった。震災後佐々木さ

んと連絡がついて手伝うことはないかと聞き、すぐに入った。

震災から4度目の冬を迎えている。医療、保健、福祉、介護分野の課題は。岩室 全国的にも言えるが、住民が自主的に医療、保健、福祉、介護の分野を自分の問題として考えることができるか。一部に積極的

に活動している市民もいるが、全体的にはまだ少し市民の皆さんは受け身というか、自分から動こうという部分をうまく仕掛けられていない。もう少し住民の皆さんと、未来図会議での議論内容を共有していきたい。

例えば災害公営住宅。プライバシーは守られているけど隣の音は聞こえない。そのこととさまざまな問題が

生まれ。解決のヒントはむしろ、都会に学んでほしい。

都会の方が、人とながる大切さを感じてきている。唐場所づくりが大切で、積極的に交流できる場を誰かが仕掛けなければならぬ。そして、仕掛ける人をみんなで支えていく体制が必要だ。

できる人が、できることをする。できることというのは、何も自治会長や区長になるのではなく、例えばそうした役割で頑張っている人に「ごころうさま」と感謝の言葉をかけるだけでもいい。優しさや思いやり、感謝などを改めて確認することも必要では。陸前高田でこれまで培われてきた、コミュニケーション力をちょっとハイペースで取り戻すことを意識してもらえれば、間違いなく良くなる。

震災後に始まった未来図会議は今年で50回。一人暮らし生活への支援、高齢者の健康保持といった課題について語り合う場を設けてきた。成果と、今後の役割は。岩室 こういう会議の持ち方があるんだ、と市役所の中に浸透してきたのかなと思う。この会議では役職に上下関係がなく、基本的に参加者は平等。まだ市民にまでは十分には入っていないけど、関係機関の中では、参加しているのが新しい視点だったり、新たなネットワークが生まれることに気づき始めているのでは。

まず集まる(はまかだ)ことが大切だし、テーマや問題意識を共有する(かだる)ことも重要。こうした場が継続されていることが、大事だと思う。これからはもっと大きな陸前高田の夢や、まさに未来図をつくり続けたい。大勢の人に呼ばってもらいたい。うちの地区ではこんなことをやっているよ、などと伝え合い、それぞれができることを共有していくような広がりを持たせたい。

(聞き手・佐藤 壮)